

草
蒲

きょうど

の

民
話

でんせつ



その① 菱ヶ岳の雪崩

春三月、南風が吹くころになると、菱ヶ岳の頂上附近から

決まって雪崩がふもとに向かって出る。その雪崩について色々なことが言われている。

雪崩がふもとに下るにしたがって広がるのは、末広がりといって

豊作のしるしであると言われている。

雪崩が菖蒲の村の方へ向かってつくと、その年は菖蒲の村に色々な災難があり

須川の方へ向かってつくとときは、災難はないと言われている。

菱ヶ岳の雪崩のつく現場を見た者は

その年に何かの災難に遭うというので、恐れられている。



その② かたくり

野山の雪も消え、木の芽草の芽も出て、春の日がぽかぽかと暖かいある日
野山の雪も消え、木の芽草の芽も出て、春の日がぽかぽかと暖かいある日
菖蒲の諏訪神社の神様が、野山に散歩にお出かけになった。

美しい春の野山の景色にうっとりで見とれながらいておられた時

草の芽を踏まれた拍子に、つるりと滑って前のめりに転んでしまわれた。

その時、何かの草の葉で目をいやというほど突いてしまわれた。

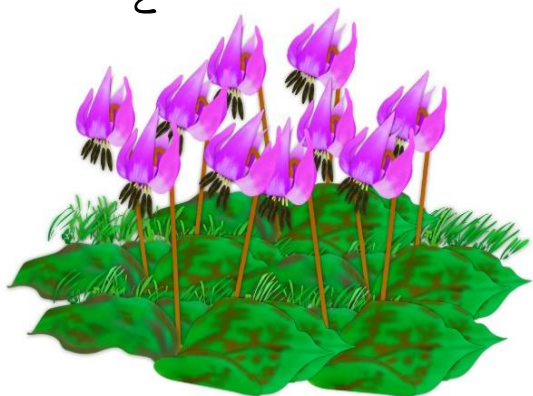
神様は目が痛くて痛くて、しばらくは起き上がることもできず

転んだまま痛い目を押さえて、痛さをこらえておられた。

ようやく痛みが薄らいできたので、何が俺を滑らせ

何が俺の目を突いたのだろうと思つて、目を開けてごらんになると

その辺り一面に生えているカタクリを踏んで滑り



春の生気を吸って伸びはじめた麦の葉先で目を突いたのでした。

神様はたいそう怒られて、カタクリに向かって

「お前のために俺は滑って転んで目を突いて、痛い目に遭ったから

お前のようなものは、もう菖蒲の土地に生えるな」と言い

麦に向かって「お前がそこに生えていなければ

俺は目を突いて痛い目に遭うことはなかったのだから、お前も菖蒲の地に生えるな」

と言いだしたという。それからカタクリは、菖蒲の土地に生えなくなり

麦も育たなくなったという。

今も不思議なことに、諏訪神社から上手の方は県境まで

菖蒲の土地にはカタクリは、一本も生えていなく

また、麦は作ってもどうしても育たないから、麦作りはしないと村人は言っている。

その③ 蛇紋竹 じゃもんだけ

昔、蒲生の池の主に一人の娘があった。この娘が年頃になったので
この娘に良い婿をと、方々を訪ねると

野々海の池の主に立派な息子がいるという話を聞いて

鼻毛の池の主に仲人を頼んで行ってもらった。

すると、野々海の池の主の言うには

「蒲生の池は村の下にあって、ごみが流れ込むごみ池だから

あんな池に息子をくれることはできない」と言って馬鹿にした。

それを聞いた蒲生の池の主は、非常に腹を立てて、とうとうけんかを始めた。

鼻毛の池の主も、蒲生の池の主に応援した。

蒲生の池の主は、水梨のある家から刀を一振り借り

鼻毛の池の主は、浦田の小坂という家から刀一振りと

尾先が切ってあった白馬一頭を借りて、それに乗って出かけ、野々海へやってきた。

野々海の池の主もそれがあることを悟って、下船のおやけという家から

「勝てばお礼に黄金の延べ棒をやるから、女どもには決して話してくれるな」

と頼んで、刀を一振り借りてきていた。

野々海の池の端へ着くと、蒲生の池の主は、鼻毛の池の主は

「俺が池の中に入って戦うから、あなたはこの池の端にいて

赤い波が浮いてきたら刀で切り、白い波が浮いてきたら

しっかりやれと応援してください」と頼んで、池の中へ飛び込んだ。

そうして、刀を抜いて切りあいを始めたが、勝負はなかなかつかない。

しかし、だんだん野々海の池の主は負け戦になってきた。

野々海の池の主は「こんなはずはないのだが、さては

黄金の延べ棒の話を女どもに言ったに違いない。残念だ」と叫んだ。

鼻毛の池の主が池の端にいと、赤い波、白い波が浮いてきたので

蒲生の池の主の言ったように、赤い波は刀で切り、白い波には応援していた。

そのうちに野々海の池は、赤い血でいっぱいになった。

野々海の池の主や家族は、蒲生の池の主に切り殺されてしまったのでした。

やがて、蒲生の池の主は池の中から上がってきて、戦いに勝ったことを喜び

鼻毛の池の主に応援を感謝して、凱旋した。

野々海の池の赤い血は、西口から三日三晩も流れ、保倉川を真っ赤に染めたという。

その時、血しぶきのかかった竹が今でも『蛇紋竹』といっ

美しい模様の付いた竹は、保倉川沿岸の名物になっている。

この戦いがあった後、野々海の池には子どもが一匹残されたということが分かって

蒲生の池の主も鼻毛の池の主も、かたき討ちをされることを恐れ

どこかへ姿を隠してしまったので、蒲生の池はあせて田んぼになり

鼻毛の池もあせて、水を払えば底が見えるようになった。

野々海の池も、主の子どもがよそへ行ってしまったので

あせて草が生えたり、小さい木が生えるようになった。

この池は現在、長野県の耕地の用水ダムになっているが

十七歳の少女が夜の丑の刻に、あかがねの鍬で三くわうなえば

昔のような池になるとい言い伝えがある。



その④ しびったれ

保倉川の上流、県境に近い菖蒲の地に『しびったれ』という所がある。

昔、湯の神がその『しびったれ』にやって来た。

場所は沢だが滝があり、水は清く、量はたくさんあるので

ここに温泉を出そうと思って、その近くにいた村人に

「ここは、何という名の場所か」とお聞きになった。

村人は「ここは『しびったれ』という所です」と答えた。

湯の神は「ここは名前が悪いから、ここに温泉を出すのはやめよう」と言って

また歩いていかれました。『しびったれ』という良い名でなかったのです。

湯の神に見放されてしまったのです。

湯の神は途中疲れたので、見ると、畳十三畳も敷かれるような大石があったので

それに腰掛^{こしか}けて休^{やす}んで疲^{つか}れをな^おして、また出^でかけ

山^{やま}を越^こえて松^{まつ}之^の山^{やま}の方^{ほう}へ行^いかれ、松^{まつ}之^の山^{やま}で湯^ゆを出^だされたという。

湯^ゆの神^{かみ}が腰^{こし}かけて休^{やす}んだという大^{おお}石^{いし}は、今^{いま}もあ^あって

湯^ゆの神^{かみ}が腰^{こし}かけたというので、いつでも、湿^{しめ}ったようになってい^いるというこ^ことです。



その⑤ 龍摺石

菖蒲から浦田へ越える道を登って行くと、小川の端に龍摺石という石がある。
昔、この辺りは眺めのいい場所なので、龍がここに住み家を作ろうと思って
天から降りて来たが、降りてみると狭い場所
とても住むことができないので、再び、天へ舞い上がって行った。

その舞い上がる時、龍が尾でそこにあつた石を摺って、石に穴をあけて
白のようにして行った。その穴には、いつも水が絶えなと言われていた。
それでこの石を、龍摺石というようになったという。

菖蒲の『おやじ』という家のずっと前の方が

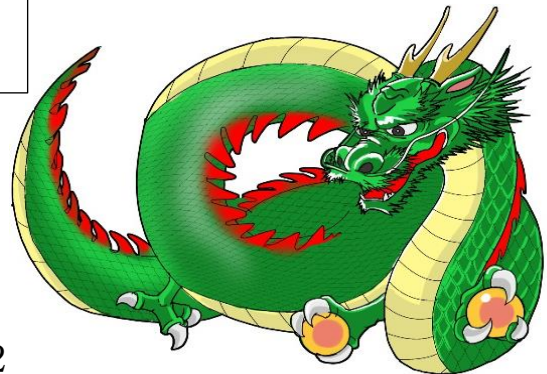
その石が珍しいから庭石にしたいと思い、大勢の人を頼んで

その石を動かそうとしたが、なかなか動かない。

そして空がかき曇って暴風雨となり、幾日も荒れる日が続いたので

石を動かして運ぶことをあきらめて、その仕事を止めると

空は晴れ上がって、良いお天気になったということです。



上越市大島区菖蒲の地には、いろいろな伝説があり昔の話を今に伝えていますが、時がたつにつれてこの懐かしい伝説を知る人が、だんだんと少なくなってきました。ここでは、菖蒲に伝わる伝説を、五話だけ紹介しました。伝説の中には、一つで色々な語り継がれているものがありますが旧大島村立菖蒲小学校に勤務（昭29〜38）し当時の人の話や資料を見て、各方面から考察しその中で最も正しいと思うものを「郷土の伝説を拾う」として収集してくれた、山岸文作氏の資料を基に掲載しました。（s）